

委員長あいさつ

土木史研究への期待

土木史研究委員会 委員長
日本大学理工学部 教授

天野 光一

温故知新という言葉は言い古されて久しいが、様々な分野でその歴史を明らかにすることの重要性は言うまでもなく、土木の研究教育分野で土木史の重要性は当然ともいうべきであろう。そのような意識を持っている小生にとって、土木史研究発表会は同様の意識を持つ仲間と議論のできる楽しい機会の一つである。

この機会を利用して是非土木史研究者の諸氏と議論をしたい内容として小生の考える土木史研究への期待を述べてみたい。もちろん、正確な資料に基づき史実を明らかにする研究が重要であることを前提として、それ以外への小生の期待である。第一は、研究成果を様々な場面で有効に活用することである。元委員長の中村良夫先生もおっしゃっていたが、計画を立案するとき、微修正であれば様々なシミュレーションなどが有効であろうが、大きな方向性を定めるためには歴史的観点が不可欠である。小生も同感である。まちや地域や国などの計画を考える際は、それまでの計画の歴史を知ることが有効であるし、新たな設計技術を考案する場合ですら、それまでの技術の発展を顧みることがその発想のために有効な手段であろうと考える。また、直接的には、歴史まちづくりまでとは言わなくとも、それぞれのまちにある歴史は間違いなくそのまちの資源でありそれ

をまちづくりに活かすという観点は必要不可欠である。第二は、土木史研究の一般市民への広報である。地域の歴史、施設、建造物の由来を知った方が、より深く理解し、楽しめるということもあるし、まちや地域、もしくは建造物を見るとき、その後ろにある土木技術に気づいていただくことは、我々の分野の重要性の理解につながるとも考えてよい。第三は、土木史教育の重要性のドボク学科（最近上梓された書籍の記述に倣おう）への、周知である。ドボクを志す若者にとって、土木史を学ぶことは、特効薬のようにすぐ何かに役立つというわけでは必ずしもないが、土木の専門家を目指す者にとっては、ドボクという専門の、基礎的な教養と言って過言でない。全国のドボク学科で、土木史教育を行うことは、土木の教育にとって重要であると考えると同時に、若い土木史研究者の育成に結びつくものとも考える。以上の三つの観点は、「研究」としてまとめるには、それ相当の苦労もあろうし、史実を明らかにすることを中心として考えている研究者たちからは疑問符をうたれるかもしれない。発表会の場では議論しづらい話題であろうが、懇親会の場でも、是非皆さんと議論したいものだと考えている。こんなとりとめのない議論も楽しもうではありませんか。